

# えんがわ わわわ! 和話笑

「縁がわ 和・話・笑」



## 高齢者の夢&介護者の声を伝えるマガジン

高齢者にも、もちろん夢があります。楽しみ、生きがいがあります。  
そこから伝わる言葉やぬくもりが私たちに大切なことを教えてくれます。  
高齢者事業と介護を明るく生き生きと。  
写真、言葉、音楽で発信します。

### 編集後記

えんがわを作り始めて、1年になりました。初めは、手探りで始まったのですが、ご紹介させていただいた方々の満面の笑顔が印象的で、こんなに喜ばれるものなのか、と驚きながらの制作でした。  
作り始めて、1年の間に、テレビでの特集、新聞の大きな記事での掲載、まさかの美術館での展示、コンサートの開催、お電話で、文化勲章をもらったほうがいいよ、えんがわを送ってほしい、などなど、驚くような反響の数々。  
こんな声をいただくと、やはり、こういうものが世の中に無かったんだと確信しました。  
現在、まさに高齢化社会となっているのにも関わらず、高齢者の方々の生活、楽しみ、希望というものを共有できるものが全くないには驚かされます。そんな中、私たちも、見守り活動も含めた高齢者配食を手がけながら、配達の中で気づいたこと、高齢者の皆さんの楽しみの共有、こんなサービスがあるというご紹介、こんな人がいるなら、まだまだ私も何かやってみようかな?という希望が持てる情報など、えんがわがこれから果たして行かなくてはならない役割は大きいと感じています。

今回は、78歳にして、音楽制作をさらに広げようとしてみえる堀六平さんの特集しました。  
私は地元は愛知県で、六平さんのことはあまり知らなかったのですが、長野県では、ちょうど70代、80代の方々の同世代に愛されている音楽を発信する貴重な音楽家であることを知りました。その方がたまたま弊社に音楽制作のご依頼があり、生で話を聞いていると、まったく飾り気のない、素の自分で出来ることをやろうと思ったらそこには音楽しかなかったの、それをやっていたら病気で寛解してしまうという素敵なお話を伺い、是非えんがわに、とお話をしたら、快諾をいただきました。  
まるで、えんがわを通して、わらわら長者のように、次から次へ、人がつながって行くというもとても感動的でした。  
今回は、視覚障がい者の仕事、ということについてや、デイサービスや老人ホームに入るためには、という社会的な問題や、意外と知らない情報についても深掘りして掲載しました。  
前のえんがわと比較すると、少しむずかしい内容に感じられるかもしれませんが、何の村度もない環境だからこそお伝えできる内容をこれからもお知らせしていきたいと思っています。  
音楽についても、えんがわ得意の高齢者の皆様にも喜んでいただける音楽を、QRコードでスマホで聴いていただけるというのを、これからもふんだんに入れ込んでいきたいと思っています。  
次回は2025年1月末から2月初旬に3号が発刊される予定になっております。  
合わせてお楽しみにいただければと思います。

今回も、えんがわ2号をお手にとっていただき、本当にありがとうございます。  
えんがわ2号発刊にあたりまして、ご支援をいただいております、信州アーツカウンシル様はじめ、ご協力いただきました皆様方に、心より感謝申し上げます。

えんがわ和話笑 編集部

合同会社ARTWINGLABEL 担当 辻 敬

### 次号予告

特集 堀六平 対談2

懐かしの歌

エピソードを添えてご紹介

訪問マッサージの課題2

聴きたい歌、歌いたい曲

インターネットで曲が聴ける

私の手仕事作品紹介

※自薦他薦問わず、高齢者のみなさまの情報、作品を募集しております。 ※コトバ募集 あなたのコトバや作品が歌になるかも。

制作:合同会社ARTWINGLABEL・スタジオ OTOKOTO 企画:高齢者の方々のことばプロジェクト  
お問い合わせ先:長野県松本市笹賀3038-88 スタジオ OTOKOTO Phone:080-8018-1013 担当 辻

支援: 信州アーツカウンシル (一般財団法人長野県文化振興事業団) 文化庁 令和6年度文化庁文化芸術創造拠点形成事業

# えんがわ わわわ! 和話笑

「縁をつむぐ」高齢者の夢&介護者の声



特集 堀六平対談

訪問マッサージの課題

超老芸術展 開催

傾聴サービスを受けてみよう

介護事業の現場から

懐かしの歌

私の手仕事作品紹介

聴きたい歌、歌いたい曲

Vol.2

# 特集 堀六平対談



## プロフィール

1946年1月25日生まれ  
 長野県安曇野市穂高北穂高出身。  
 1969年 高校の同窓生とわさび一ず結成  
 1975年 アルバム「木曾の花嫁さん」でビクターよりメジャーデビュー  
 1977年 わさび一ず解散 拠点を信州に。  
 1991年 わさび一ず21結成。  
 2022年 堀六平音楽活動50周年記念コンサート 大歌まつり開催  
 現在は78歳。歌声音楽会を各地で開催。

今回はとても良い機会を奇跡的にいただきました。  
 長野県で高齢者の方々がよくご存知とおっしゃる「わさび一ず」の楽曲制作ボーカル担当の堀六平さんから、弊社にCD制作のお問い合わせをいただいたのだ。  
 以前に仕事でわさび一ずの音源を手掛けたこともあったのですが、ご本人とお会いしてお話出来るのは初めて。いろいろお話の中で、「えんがわ」に掲載したいというお話をしたら、快諾していただき、今回の取材に至りました。  
 堀六平さんの記事は、えんがわ2号、3号に渡って掲載いたします。どうぞお楽しみに。  
 近年の堀六平さん（以降 六平さんと呼びます。）は、前立腺がんを発症され、病と闘っておられました。今では、寛解の状況になられて、78歳になった今でも、最新のCDアルバム制作に意欲的であられるという六平さんの思いに迫りたいと思います。

## ◆病気との共存

「がんになったときも、正直勝てるかな?という気持ち、音楽でのプラスの気持ちの影響もあり、寛解になってきたとも思う。歌活動を始めて55年。鳴かず飛ばずだから55年だよ。売っていたら20年くらいで終わっていたかもしれない。」  
 高齢者で病気になったりすると、もう人生終わらだ、と思ったりすることもあるかと思いますが、六平さんはひとすじの希望だと思えますね。

「ただ実際に、がんと聞かされた時にはもう終わりかと思っただけで涙がぼろぼろ出たよ。やり残したこともたんとあると思っただけ。それが、お医者さんに助けられて、あれから4年。7年たつと寛解もすっかりしたものになるみたいで。お医者さんが言うには、六平さん、病気で死ぬか、寿命で死ぬかだよ。(笑) 実際そうなんだよね。それで、腹に覚悟を決めさせてもらった、というかね。」  
 「わさび一ずを結成したのが、高校を出た直後だったわけ。昭和39年からスタートしてずっと。55年だもんね。財産もあったけど全部使っちゃった。武田〇矢も何かを犠牲にしなければ自分がしたいことが出来ないって言うってた。」

いろんな犠牲の上にいるのも、感謝の元ですね。

「こういうことを経験しておく、友人や仲間に、おい!元気だせや!って言えるじゃん」

## ◆歌声音楽会

「どこまでが限度で、価値あることかって判断できない。たいした人生ではないが、自分ではそこそこ喜んで。内心。」  
 「銭はないけど。(笑)」  
 (写真を撮られて)  
 「俺は意外シャイなんだよ。葬式に使えるかもね。(笑)」

55年、いろいろあったんじゃないですか?

「音楽をやめよう、なんて思ったことなんか、いくらでもある。こんなことやってらちあかないし、銭はないし。ホントにばかばかしいことをやってるな、と思うけど、多くの仲間はみんなそうらしいや。」  
 「こういうの、俺もあった。一回や二回じゃないよ。」

手に職があるわけじゃないし、工場行っただけでかたがた、体がもたないしね。それなら、自分が一番培ってきた音楽活動の中で社会福祉なり、これを役に立てられないかと思って。」  
 「13年前、国政選挙をしたときに、歌わないジジやババが多いから、歌でやってくれや!というのがあって、始まったの。」

それで、今の歌声音楽会につながって行くんですね。

「そうそう。」

歌声音楽会にご参加の皆さんからお話を聴いていますが、大きな声で唄えるから、ストレス発散になっておっしゃってましたもんね。

「病院の先生からも、歌は免疫を高めるし、ものすごくいいことだから、ホントにやれ、と言われてね。その監修を受けたようなもんで、ドンドン力が付いてね、いろんな人が来るようになったのね。一番多いときで400人くらいかな。今は300人くらい。沢山の方々に参加してくれるようになったね。」

希望を持って、明日どうなるか分からないけど希望を持って生き続けるなんて、大事なことですね。

「俺本人がさ、歌声がなけりゃ、寂しくてさ。」  
 「毎月5会場くらいしかやってないけれども、そういう人に会いたくてさ。」

ライブの本質ですね。

「うるさいジジや、ババばかりだけさ。ため口ばかり言われちゃってさ。こんちきしょう、とか思ったけど、あと何年生きれる?と思うと喧嘩する気になれなくてね。」  
 「俺は俺のやり方でやるで、来てくれて話だわ。」  
 「こうやって、態度でかくして、こうやって続いているのが現状だね。」  
 「本当に態度でかいからね!(笑)」

でも、みんなそれが楽しいんじゃないですか?  
 78歳で、こんなに声が出るのもすごいって話も聞きますが。

「あれはね、やっぱ、訓練だと思う。歌声の。」  
 「あれが、訓練になってる。結果的には。」



「コンサートの中で言うだ! 80歳に近いだもん。普通はああいう声でねえよ!」

「数えるほどしかないんだよね。75歳~80歳の間でね。」

## ◆音楽の仲間たちに支えられて

80歳を超えると引退ムードになってしまう方もいらっしゃると思いますが、今は生涯現役という時代ですけど・・・

「俺はこれしかないんだよ。」「本当にこれしかないんだ。」

「みんなプロの連中が、俺の相手をしてくれてるんで、ありがたいんだよ。」

プロの人たちが周りにいてくれるからいいものが出来るんですね!

「ありがたい話さ。」  
 「それには、いかに自分の身を大事にして、変な風にならずに、報いられるようなかたちのものが出来るか!」  
 「あっちもあっち、こっちもこっち、お互い様。」

「俺と同じような悩みを持っている人がいれば、さっき言った希望をもって、自分の得意なものが、必ずあるはずだから、それをいかに助長させるか、発展させるか。それにいつも頭をつけてる。」  
 「こたつに入っている生かぬから。俺はがんになってから、ガン疼痛ってね、やっと最近歩けるようになったけど、そういうものもあるもんで。」  
 「自分が何が出来るか、考えてみてね、何でもいいんだよ。絵描いてもいいし、アートでもいいし、音楽でもいいし、何でもいいんだよ。」  
 「そこどこに生きがいを見つければ、長生きしようと思えるよな。どんどん果てしなく続くんだもん。」  
 「もう死にたいなんて言ってるやつほど、死ねないんだよ。(笑)」  
 「俺だってあったよ。もう何にもしたくない!! もう何にもしたくないってことはあった。だけどそれは脱却した。」  
 「パソコンとか、AIの世界も、paypayとか、ああいうのも何だかわからない。こういうことを分かっている人がそばにいないかぎり、そんなことはできない。」  
 「電気くうから、エアコンをつけるのをやめようっていうのも間違いだね。せっかくあるんだから、しっかり付けてね、って思う様になったね。」  
 「俺が爆弾二つもってるで、今年こそ、感じたね、エアコン、クーラーがあつてよかった。」  
 「暑くて、バタンキューって感じだけど、夏が一番いいのはね、お茶!! なんか糖尿病にもいいらしいね。」  
 「それとなんでも食べてさ! だけど俺にもきらいなものもあるだよ。」



## ◆食べ物談義

何がきらいなんですか??

「フォアクラとかさ」「きのこ・トリュフとか」

そんなのめったに出ませんよね。(笑)

「あと、豚足とかね。(笑)」

きらいなものは食べなくてもいいかと思うんですが、食べるものとか注意していることはあるんですか?

「それはないけれど、過ぎるといかに言われてるけど」「ラーメンライス。これは俺みたいな糖尿予備軍にはだめ。」「中華味とかも、しょっちゅう食べてると飽きちゃうから、自分で作るのがいちばんいいよ。」「カレーもラーメンも自分で作る。それが一番いいと思うんだよ。」

「それと、俺は素材を食べたいっていうのがあるんだよね。」「なすにしてもキュウリにしても、素材を食べる。ぬか漬けとかも大好きだ。」

「じい、ばばあになつてくると、こだわりの塩分がいいなって、俺の死んだおっかあもよく言ってた。」「俺の最高の好物はね、唯一 塩むすび!」「なすの漬けたのをもって、塩むすびを食べる!これはうめーなー!」

「それと、塩にあきたら、味噌!味噌むすび!」

愛知県は八丁味噌の文化が根付いてますからね。

「味噌の醸造文化はちょっと研究したこともあってね。」「どんな病気にもいいんだってね!!」

「梅干しとかもおいしいね〜。」「甘くしても、すっぱくしても食べちゃう。」

続きは、第3号でお送りいたします。 お楽しみに。

# 超老芸術展 開催

2024年7月6日(土)から8月25日(日)にかけ、北アルプス展望美術館に於いて超老芸術展 in 池田町と銘を打ち、開催されました。

この展覧会を企画したアーツカウンシルしずおかでは、高齢になってから、若しくは高齢になってもなお、独自の表現活動続ける人々を「超老芸術」と名づけ、発掘・紹介を続けてきました。

今回は、信州アーツカウンシルの協力を得て『超老芸術展 in 池田町』として開催となりました。

全国から素敵な作品が展示される中、このえんがわ0号、1号でご紹介させていただいた作品も美術館に展示となりました。

期間中、2000人以上の方のご来館をいただき、すばらしい展覧会となりました。

美術館スタッフの皆様、アーツカウンシルしずおかの柳野展正様をはじめ、信州アーツカウンシルの皆様、また、ご協力いただきました皆様方に厚く御礼申し上げます。



えんがわ0号より



折り紙 赤羽 弘さん 93歳

えんがわ1号より



服づくり 上原 紀子さん 81歳



俳句 松井 武石さん 90歳



アクリルたわし作り 高山 久子さん 84歳



書 荻村 久子さん 80歳



昆虫研究 腰原 正己さん 76歳

# 介護事業の現場から

まごのて温泉デイ&ホーム 施設長 赤羽 謙一さん



2号では、松本市里山辺、まごのて温泉デイ&ホームを取り上げさせていただきます。施設長の赤羽 謙一さんは、介護事業のかたわら、ミュージシャンもされています。



## ◆温泉デイ&ホームについて

この施設はデイサービスと老人ホームがドッキングしており、正確には住宅型有料老人ホームとデイサービスを併設した施設となります。

日常にお客様との関わりというものを強く持ち、日々の利用者様の状態などを把握しながら、なるべく触れ合う時間は多くとっています。施設内に飾られているお花の写真などは、やっぱりうちにデイサービスに通われている方の作品で、山へ行ってお花を撮影するのが趣味で、定期的に写真を入れ替えてくださる方もいらっしゃいます。

こちらの施設は温泉がついているんですね。

湯の原の温泉です。同地区の公共浴場にある白糸の湯と同じ源泉を引いていて、普通のお風呂より温まり方が違うとかで、温泉に入るのを楽しみに通われている方も結構多いです。

赤羽さんが苦労していることもお尋ねしてみました。

やっぱりジェネレーションギャップというか、人生の先輩たちが生きてきた時代のことと、私たちが普段生活している生活様式が違ったり、例えば洗濯の仕方もそうですし、それからご飯の作り方も、そういうものがちょっと今と違うんですね。そこに新しい発見もあります。それから高齢者がみんな知っている、例えばナツメロとか音楽ですね、よく流すんですけど我々は全然知らない、全く知らない音楽だったけど、皆さんは知っている曲があったり、日々新しい発見があります。

赤羽さんは音楽をやっているから、共通点もあったりして嬉しくなっちゃうそうです。次に、本当に今介護の現状だとか、赤羽さんの話を感じてみる、今感じている問題などは何かありますか?とお聞きしました。

## ◆デイサービスとは何ぞや

痛感したのは、例えば今までこういう施設を利用したことがないと、デイサービスとは何ぞや、という方がまだたくさんいらっしゃって、ここに通うにはどうしたらいいですか、というお問い合わせをいただくことがあるんです。我々はまずお願いするのが、とりあえずケアマネジャーさんに相談してください、とお伝えするんです。

介護保険の仕組みを、まだまだ知らない方が大勢いらっしゃいます。例えば、ただお金さえ払えば、こういう施設に入れるわけではなくて、その前に介護認定を受けて、介護度がどれくらいなのかということ。この施設に入るときもそうですけど、どの程度の介護度か、わからないと、入る資格がもらえないんですね。

この施設の、有料老人ホームのほうは「介護度1」から入れます。支援の方は残念ながらまだ入れないんですが、デイサービスのほうは今「要支援1」から利用できますので、随時募集している最中です。

問い合わせがあれば、市役所に相談窓口で、ケアマネジャーさんをつける方法を探るところから始められれば、いかがでしょうかという話をしていますし、場合によっては、私どもから知り合いのケアマネジャーさんを紹介するというのもさせていただきます。分からないことは、ご連絡いただければ、最適な介護サービスを受けられるように、こちらで提案できるかなと思います。私たちが本当にビジネスライクにただお客さんを増やせばいいということではなく、本当にその人にとって一番有効なサービスを考え、例えばここに来るより、ご自宅にお洗濯のサービスを入れる方がいいですよとか、ただここに来て横になって寝るだけじゃなくて、機能訓練リハビリの先生を部屋に呼んでリハビリしてもらったりマッサージしてもらった方がいいんじゃないですかという提案もさせていただきます。

## ◆特別な日

特にデイサービスなんかそれを思うんですけど、例えば週に1回でも2回でも通ってくださる方って、本人にとっては例えば街に買い物に行くみたいな感覚で、この日だけはオシャレしようとか、デイサービスだからって気持ちも分だけぐっと引き締まるというか、そういう形になると思うんです。着る服も変えてみたり、なじみのお客様同士でお話しするのを楽しみに来てる。そのためにはちょっとオシャレしようとか、少し口紅でも引いていこうかって方がいらっしゃって、生活のメリハリも出てとていいと思うんです。そんなことから心の若返りを図る意味でも、こういう施設って必要かなと思いますし、やっぱりご本人が張り合いにきていただけるっていうことも、とても重要なことかなと思います。

## ◆施設長さんの音楽での名前は「すきっぱー赤羽」

音楽にも仕事にもいい影響とかを受けることはありますか?

もちろんありますね。お客様の感じている心の動きだったり、例えば喜怒哀楽のポイントというか、スイッチが入る部分なんていうのは、共感できたりとか、驚いたりとか、それを歌に落とし込んだり、歌詞にしたりということもあります。それから最近だとナツメロを参考にして、ちょっと昔のコード進行で、全く違った歌詞をつけて曲を作ってみたり、ということもあります。音楽的にも、ここでナツメロを聴いたり、一緒に歌ったりすることというのは、とても個人的に刺激になってます。いつも演奏に来て下さるボランティアさんをお願いすることなんですけれども、もちろん高齢者に合わせた歌を歌って、演奏してもらいたいんですけど、本当は自分たちの持ち味である曲だったり、自分が得意なものをやっても良かった方が、実は高齢者も好きです。その方が、実は高齢者もすごく刺激になるんですね。洋楽だったり、ジャズだったりとか。それから全く新しい、その人たちの持ち歌、オリジナルですね。そういうものを聞かせてあげた方が、実際はそういうときの方が、感動が大きかったりするんですね。

本当にありがとうございました。

こちらこそ。

# 教えて! 元気な秘密 我的手仕事作品紹介



## 身近な材料で創作

松本市 塚田 善志郎さん (91歳)

以前に仕事の関係で耳が不自由になったのをきっかけにストローを使ったエビや、紙ひもで作った虫などの作品を作るようになりました。デイサービスの施設をはじめ、いろんな方に差し上げて喜んでいただいています。



教えて!  **元気の秘密** 私の手仕事作品紹介



## 木彫り

松本市 上兼 力三さん (79 歳)  
30歳くらいから、もう50年ちかく続けています。  
小学校や、中学校で美術や技術の教員をして、  
60歳で退職。

以前からも木彫りをやっていたのですが、  
その後の技術専門学校で木彫り教室があり  
小さなものを作るようになって、これがとても好きになりました。  
大黒様を彫ったりしていますが、こういうものは見本があつてね。  
自分で考えて作ったものももっと独特なもの、  
たとえば、えだまめとか、みょうが、オクラとかあけびなど。  
作るエネルギーは今、生徒さんがいてね。10人くらい。  
波田と梓と、築北に教室があつてね。  
今度なにやる? って言ったときに、じゃあ、これどう? って見せるの。  
これやる、とか、これはな〜とか言つて生徒のリクエストで、  
僕のエネルギーが続いています。  
そう、だから生徒の中でね、  
こういう(えだまめなど)のを立体って言うんだけど、  
立体しか作らない人と、板に絵を描いたようなのしか作らない人というんだ。  
毎月こういうのを1つと、ああいうのを1つくらいは僕が作るんだ。  
じゃあ次何やろうかになって悩みの種で、それが僕の脳の活性化につながると思うんだけど。  
次何やろうかになっていうのが。  
生徒さんの年齢層は不思議にね、特別若い人が来たりはしない。同じ年くらいの人が集まって。  
話をしに来るっていうのが半分。実際木彫りをやるのも半分くらいかな。  
ゆっくり話しているけど、それが楽しくていいのかも知れませんね。(笑)



習ってみたい方は、えんがわのお問い合わせ先にどうぞ。



# 訪問マッサージの課題



訪問マッサージは、動くのが大変な高齢者や、障がい者の皆様が、お医者さんからの同意書をいただいで、健康保険を使ってマッサージを受けることにより、患者さんの負担も少なく、大変有効で、国家資格を持つ先生方が施術をしますので、安心して受けて頂くことが出来るようになっております。私も視覚障がい者ですが、鍼灸マッサージ師の1人です。とおっしゃるのは、国家資格をお持ちの施術師、上條里美先生です。



## ◆資格を取ることへの反発

私の場合は全盲ではなく弱視という立場で、やや見えづらいというちょうど中間にあたるかなと思います。日常生活の中ではほぼこなすことができていると思います。

視覚障がい者の方はすぐ盲学校という、昔はそうでしたので、今は専門学校が長野にも医療鍼灸学院がありますが、いわゆる目に障害のない晴眼者(せいがんしゃ)の方たちと一緒に鍼灸を学ぶという方も、全盲の方でもいらっしゃいます。

私は中途半端に見えるものですから、小さい頃は普通の仕事に憧れを持っていた時期があって、私の時代は視覚障がいのある者は、盲学校を出て、あんまマッサージ、指圧、鍼灸の資格をとって、開業するなり就職するなりでした。私たちの頃はまだ病院でリハビリという分野があったので、そのリハビリの分野に行くかということで、そもその学校での将来の就職アンケートにはそのことしかなくて、それに私はすごく反発があって、目の見えない人⇒あんまさん、そういう感覚が嫌で、目が見えなくても体が不自由でもできない仕事はないというくらいの気持ちがありまして、非常にこの資格を取るのに反発を持っていたものから、あま学生時代は勉強しないで、国家資格が通ってしまったこと自体に合格したよと言われた時に、「ええっ」って感じだったくらい、勉強しなかった方です。

## ◆私にとっての天職

最終的に資格を取るのに決定付けられたのは、母が受験の段取りを学校が取ってくれた時に、「私、資格取らないよ」って言ったら、「取っときゃまたそのうち人生に役に立つこともあるかもしれない」と言われて、もう予約済で、ホテルで2泊3日の試験でしたので、長野だったので試験会場が、その時に「ホテルに行って、ご飯だけ食べて泊まってくるだけでもいいじゃん」って言われて、おいしいもの食べられるなら行くかみたいな感じで、どっちでもいいやという気持ちで受けに行っただけです。

それでもなんとか通していただけたみたいで、でもそれがあつたおかげで、たまたま自分の希望する病院に勤めて、リハビリも含めた治療できる病院が家から通えるところにあつたものから、そこに就職したんですが、それで実際患者さんと会ってみたら、やっぱりこれは私にとって天職だということにつながって今に至っています。仕事を始めてから、途中、子育て期間がありましたので、休んでいた時期もありますけど、そうですね、20年か30年ぐらいいは経ちます。でもやっぱり自分の腕に自信がなかった部分もありましたので、勉強し直しまして、民間資格という、国家資格ではないんですけど、東京にある学校へ通信で通って、技術もやり直しました。

やってみたら自分の天職だったということなんですね。今はすごくそれを感謝しています。

訪問マッサージの制度というか、そういうものは昭和30年代からあったようなのですが、やはりその頃は視覚障がい者に限定された職業だったんです。

## ◆晴眼者への職業解放による歪み

訪問するには移動手段が必要で、そういった中でなかなか自分で動ける範囲というのが決まってきましたよね。そういう意味ではタクシーを使ってもいいということで、往療料という形で訪問する訪問料ですね。

それをタクシーを使うという関係がありましたので、往療料は比較的、料金は高い設定にはなってますけど、それがだんだん、現在では、視覚障がい者だけの職業ではなくなってきて、職業開放というか、それによって、目の見える晴眼者の方も、この業界に入ってきましたので、その業界の中では、目の見える人たちは運転できますので、訪問マッサージの分野が、結構いい線行くぞ、みたいな感覚が出てきて、多くのこの仕事に従事されている中で、私たちににとっては、運転できないという、マイナスの面がありまして。

それを克服するには、ドライバーさんをつけて、動くような形で出てきてはいますが、やっぱり、マイナス面の方が、ドライバーさんに払われる賃金と、マッサージ師がいただく賃金と、経営者側の賃金とかを含めて見ていくと、やっぱり、マッサージ師が受け取れる割合が、少なくなってきたりするんですね。

それはやっぱり、健康保険の高齢者の方が病院に通ってきて、病院がサロン化されたという話題がありましたよね、昔、医療施設を高齢の方が使い過ぎているという現実。

病院のサロン化を問題視して、健康保険を使い過ぎると。そういったのを控えるために、政治の中で、自分の体は自分で守ろうみたいな方向になった時に、そうするには、病院に来るのではなくて、治療院とか、整骨院とかそちらの方へ、患者さんを診て、治療してもらうと。

そういう方向にした方がいいんじゃないか。それをするには、マッサージ師とか、鍼灸師とか、柔道の整骨院の関係の方もそうなんですが、そういう方たちが足りないということで、専門職、視覚障がい者の人たちの専門分野を晴眼者に開放しよう。その自由化を図ろうということで、だんだん専門学校が増えてきたんです。

それと同時に、資格を持たなくても、民間資格としてリラクゼーションとか、整体とか、そういう分野を広げよう、門戸を広げたわけですね。それが逆にいろいろなサービスにつながって、いろんな活動に制限がある私たちよりも、広がっているというのが現実ですね。

まず、訪問マッサージは体の不自由な方々とか、足が動かないという方々が対象で訪問マッサージをするという状況があって、そういうような方々に訪問マッサージをさせていただこうと思っても、目の見える先生だったら、こういうマッサージがあることを案内できるんですけど



ども、目の見えない先生方ってそういう案内をするということも難しい。やっぱり出向いてって営業をかけるということも難しいことは確かです。それで広告の制限というのがありますので、その広告の制限の中でパンフレットを作るとか、そういうことは業者をお願いして作ることも可能ですが、それらを今度配るとか、そういうことにも制限がありますので、やたら営業をかけられないという現実がありますね。それはもう本当に目の見える先生方でも、そういう難しいハードルがあるのに、目の見えない先生方だから、誰か本当に補助してくれる人がいないと何にもできないという。

また、営業がたとえ口コミでやれたとしても、今度は、私のように中途半端に見える場合ですと、なんとかクリアできてるんですけど、全盲の方たちだと今度は保険請求をする場合ですね。保険請求する場合にレセプトって言いますが、レセプトで申請書を記入することがまた細かいんですね。そういうことがありますので、記入も誰かに代筆してもらおうとか、そういう方がいらっしゃる方はそういうこともできますけど、点字の申請書というのはあまり聞いたことがないので、申請とかそういうパソコンで申請というのこれから進んでいくんですけど、今まではなかったですので、結局紙に書いてそれを保険の窓口へ提出するというので、書類が書けないということで保険をとどまっているという方も結構いらっしゃったり、それが最近また厳しくなってきたので、保険やって代筆してもらったんだけど、レセプトをしていた人が高齢で、わけがわからなくなってきたので、やれなくなったのでって書いてもらう人がやれなくなったから、じゃあ保険の取り扱いをやめます、とか、そういう方も治療院を開業されている方には出てきています。それは訪問に限らず来ていただく方でも一緒です。

私たち視覚障がい者の治療院を経営している方たちの中でも、待っているだけでいけないと思って立ち上がる人たちは、収入を上げている方たちもいらっしゃいますが、なかなか立ち上がりだけの気力にとどり着かないとか、もう諦めちゃって、ただ待っている間にうつ病になっちゃったりとか、そうやっていつか廃業していく方たちも出てきているようです。晴眼者の方も、私たちの業界の先行きが不安とか、先細りであるということに非常に強く訴えている方がいらして、その方たちも自分の治療院を持ちながら、デイケアという形で筋力トレーニングとか、そういう方を開業されている方もいらして、何か違う形での方向を見い出せる方たちはいいんですけど、私たち視覚障がい者はこれであとどうするんだ、みたいな。

## ◆視覚障がい者の施術者の減少傾向

それと、視覚障がい者の中でもやっぱり、施術者自身の高齢化があります。私たちの時代は、先ほど一番最初に言いましたが、目の悪い人⇒あんまさんみたいな時代じゃなくなってきて、視覚障がいがあつても違う分野での、盲学校だけじゃなく、普通の一般の学校でも、小学校、中学校、高校を含めて、受け入れてくれる学校が増えてきているので、一般の学校を卒業して、一般の仕事に就くという方たちも出てきているので、そういう意味では、職業が広められて良かったんですけど、逆に、鍼灸

マッサージの仕事に就く人がいなくなってきて、盲学校も今、学校の生徒が少なくて、今年聞いた範囲では、幼稚園と小学部、中学部、高等部の普通科、専門コースの進学ですね、それを合せて今、何と20数人くらいだそうですね、全校生徒が。

昨年度の松本盲学校の卒業生は、鍼灸マッサージと一緒に取る方のコースが1人とか、そんな感じになってきて、この業界の若い人たちがいないんですね。視覚障がい者の中では、専門学校の入学には何百万か、かかるんですけど、この仕事の魅力を感じてとか、可能性を見出して、専門学校へ行く方は増えているようです。ですので、視覚障がい者のマッサージ師というのは、本当に少子高齢化というか、その頭打ちはあるようです。

## ◆人の役に立ちたい

ただそこにありがたいことに、視覚障がい者の方たちの中でも、全盲の方とか、弱視の方の一部ですけど、障がい者年金をもらえるということがあって、何とか一人で生活するには、細々となら生活できるくらいの年金がいただけているので、それに頼っちゃう部分もあるんですね。ありがたい制度なんですけど、それがいいからいいや、みたいな感じになっている方も若干見受けられるので。

でも、やっぱり豊かな生活がしたい、自分で収入を得たい、人の役に立ちたいという、生きている張り合いとか、そういうものにつなげたいと考えていろいろ、もがいてきた方たちが、ちょっと挫折してうつ病になってしまった方たちもいます。でもそれじゃいけないと思って、いろいろ試行錯誤をしながら頑張っていく道を見出している方たちもいないわけではないので、そういう方向で制度とか、助成を受けながらもできていけばいいのかなと思います。

これから、例えば若くて目が見えないという方もたくさんいらっしゃるの、そういう方が盲学校に行くと、先ほどの話ではないけど、あんまマッサージ、鍼灸というものを学ぶだけだけれども、それを実際に活かさないという状況が今、増えているような感じですね。

新たなそういう生き方というの、いろいろと考えていかなければいけないのかもしれないけれども、目の見える先生方が参入していいよという自由化というのが、社会の歪みを大きくしているというのはあるのに、この社会の中では見て見ぬふりをされているという、そういうことを知るよしもないということもあると思うので、えんがわで今回はいろいろと取り上げていただいて、実際にこういうことがあるんだということを少し知っていただくだけでも、違うかなと思います。

次号につづく

# 傾聴サービスを受けてみよう



**高齢者のあなたのお話を聞いてくださるサービスです。**

ある日、えんがわの編集部から安原さんにご連絡をいただき、とても熱い思いを語ってくれました。それで、今回急遽、掲載させていただくことにしました。

安原 明子

3年前にお母さまを見送り、  
高齢な親の寂しさ、孤独感をわかってあげられず、  
仕事や自分の事ばかりを理由に  
気持ちに寄り添って話を聞いてあげることができなかったこと、  
一緒に共有する時間が少なかったことで後悔が残り、  
このようなサービスをさせていただこうと思われたそうです。

「高齢の1人暮らしの方、家族がいても話し相手がいない、  
孤独、寂しい時に思いを聞いてくれる人がいない、  
愚痴や悩みを聞いてほしい。  
そんな時に、私でよかったらご連絡ください。  
あなたに寄り添ってお話をお伺いいたします。

今のところ、こんなサービスという決まりはありません。  
ご連絡をいただいて、  
あなたに寄り添う方法を考えていけたら幸いに存じます。



何かのお力になれるかもしれません。是非ご連絡ください。

平日 午後 18 時から 20 時

傾聴サービスページ

土日祝 午前 10 時から午後 18 時

料金 30 分 1,000 円から お試し 500 円

電話 080-5143-5846

ご連絡の際、えんがわを見たとお伝えください。



# 懐かしの歌♪♪♪

藪原スキー小唄 ⇒ 木祖村

昭和6年に長野県木曾郡木祖村に藪原スキー場が完成。  
その当時、このスキー場のPRのため、この曲ができたとのことです。

2024年3月10日、まもなく100年を迎える  
やぶはら高原スキー場のカウントダウンイベントとして、  
藪原スキー小唄コンサートが行われました。(出演：雅音人)



「藪原スキー小唄」はこちらからお聴きいただけます。  
昭和6年の曲を現代風にアレンジしてみました。

1. スキーに行くなら 藪原(やぶはら)ゲレンデ

海拔 よんせーんごひゃく尺

白雪 白樺 山の家

みんなあなたを 待ってます

2. スキーに行くなら 藪原ゲレンデ

1、2、3、4のスロープは

木の花かざして 厚化粧

懸けつ 焦がれつ 待ってます

3. スキーに行くなら 藪原ゲレンデ

山は奥峰 野は大平

滑るも転ぶも寝て行くも

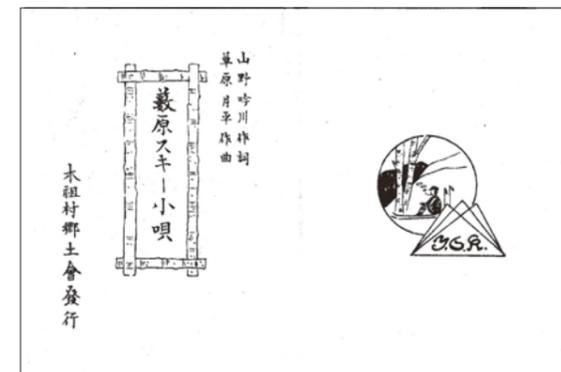
あなた任せに 待ってます

4. スキーに行くなら 藪原ゲレンデ

小雪 粉雪 深い雪

深い情けを胸に秘め

みんなあなたを 待ってます



※現在、この楽譜は株式会社湯川酒造店様の所蔵となっております。

# 聴きたい歌、歌いたい曲

## 俺のかあちゃん

堀 六平 作詞、作曲

俺のお母さんが87歳の時に書いた歌だよ。  
もうボケてきちゃってね、なので、あの、  
うちで介護を少ししたんだけどできないんです、とてもじゃないけど。  
で、お母さんに行くかって聞いたんですよ。  
施設へ行くか?って言ったら、そしたら、しばらく下向いてね、いいよって言うんだよね。  
それがね、いつもボケてるもんだから、  
歌の文句じゃないけども、ダメかなって思ったら、やっぱりボケてないんですよ。  
だから、「お前のためならどこでも行くぞ」って言うんですよ。  
それを詞にしたのが、俺の母ちゃんってことだよ。  
いいですね歌って。泣いちゃったな。思い出すんだもん。



「俺のかあちゃん」は  
こちらから  
お聴きいただけます。

1. 珍しく酒が飲みたいと  
茶碗酒、美味そうにすすり  
焼き魚の骨が嫌だと  
大声で文句を言ったり  
  
物忘れの激しさに悔しそうに  
何でこんなと泣いていた  
畑で転んで あざになったと  
ツバつけて足を摩っていた  
  
嫁に来て65年  
いつもの部屋で 何時も見慣れた  
村の景色を楽しんでいた
2. とぼとぼと畔道を歩き  
様々な人達と会い  
心碎いて子供を育て  
腰の曲がるまで畑を耕した  
若い頃の思い出話は  
細かに覚えていても  
たった今、話したことは忘れ  
都合の悪い事は聞こえぬ振り  
  
戦争にかり出された  
親父を待ってひたむきに耐えた  
俺の生涯は  
不幸だったと嘆いていた  
  
小うるさく小言を言ったり  
感情をむき出しにしたり  
時にはぼんやりと・・・雨だれ見てた  
俺の母 母ちゃんの  
昔の優しい 横顔があった

- 間奏
4. ある朝 俺は思い切って  
老人ホームに行かないかって  
仕事の都合で一緒にいられないって  
母は黙って下を向いた  
  
いつもいつも ぼけてた母は  
しばらく黙っていたが  
お前の為なら何処へでも行くで  
何も気にしないでいいだ  
少しか俺を見て  
笑ったような気がした  
ぼけてなんか居ないと  
涙がこぼれた
5. 本当は一緒に住んで  
美味しいお茶でも飲みたい  
大根の煮物で地酒の一杯も  
一緒に飲んでみたいもの  
  
二人で飲んだ最後のお茶は  
渋くて甘い味がした  
何もこんな時に茶柱がたち  
何処までも親不幸な俺だった  
  
振り返れば秋も終わり  
窓の向こうに初雪が来て  
母を見送りながら  
影踏む自分が居た  
  
母を見送りながら  
影踏む自分が居た

## 春へ

雅音人  
作詞、作曲 Tamiko

人の心は弱いもの。  
幾度となく 涙こぼし 無意味にさえ感じ生きた日々  
ああどうか この痛みの分だけ  
幸せに近づきますように

みんな辛い過去があったり、今が辛かったりしても  
その痛みの分だけ幸せに近づきますように。  
そんな切々たる願い。

1. 雪帽子をかぶった木々も  
凍った土の下の草の根も  
見えるでもない春の訪れを  
じっとじっと待ち続ける  
  
何て弱い人の心  
わずかなつまずきに諦めて  
ああどうか 雪割り草のように  
ささやかに強く生きたい  
  
春へ 春へと心はなびく  
春へ 春へと思いをつのらせ  
希望の光に包まれて  
いつか花を咲かせたい

2. 今は固い 夢のつぼみも  
時を迎えれば目覚めるだろう  
愛の力を蓄えるために  
じっと じっと耐えるのだろう

幾度となく 涙こぼし  
無意味にさえ感じ生きた日々  
ああどうか この痛みの分だけ  
幸せに近づきますように

春へ 春へと 陽射しが和む  
春へ 春へと 暦をめくって  
たとえ小さくともあたたかく  
薫る花を咲かせたい

みんなそうして生きていると思います。  
年齢なんて関係ありません。  
命あるかぎり、明日への希望を持って、  
薫る花を咲かせましょう。

この春へは、季節の春だけではありません。  
心の春、希望の春、を願い、  
その思いを歌い込みました。

3. いつの日にか 大事な人に  
胸を張って笑顔見せたい  
ああそして 支えてくれた人に  
ありがとうと言えますように  
  
春へ 春へと すべてが急ぐ  
春へ 春へと命の限りに  
希望の光に包まれて  
いつか花を咲かせたい  
  
春へ 春へと すべてが急ぐ  
春へ 春へと命の限りに  
希望の光に包まれて  
いつか花を咲かせたい

薫る花を咲かせたい



「春へ」は  
こちらから  
お聴きいただけます。